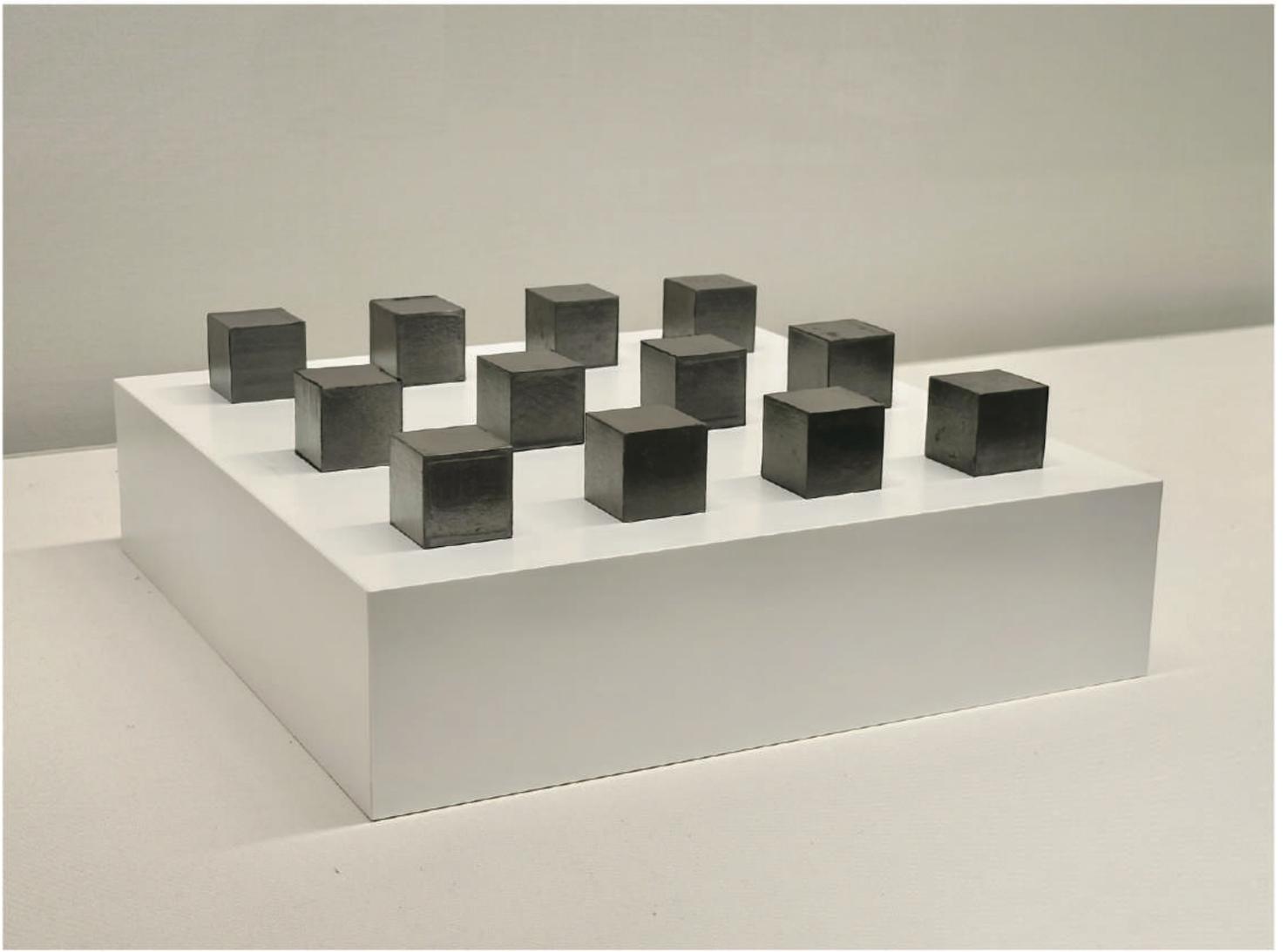


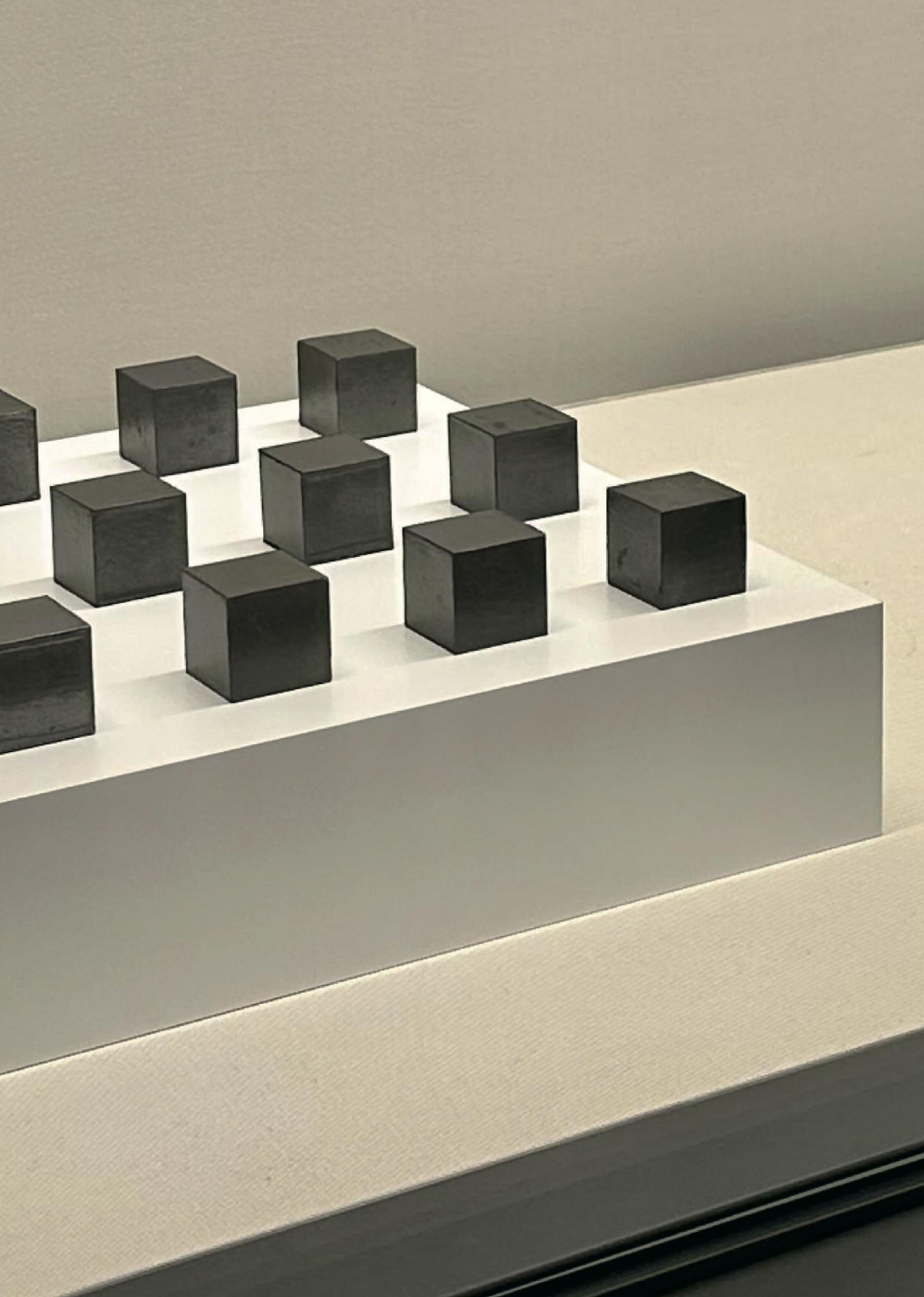
大阪大学中之島芸術センター開講授業アーカイヴ
2023-25

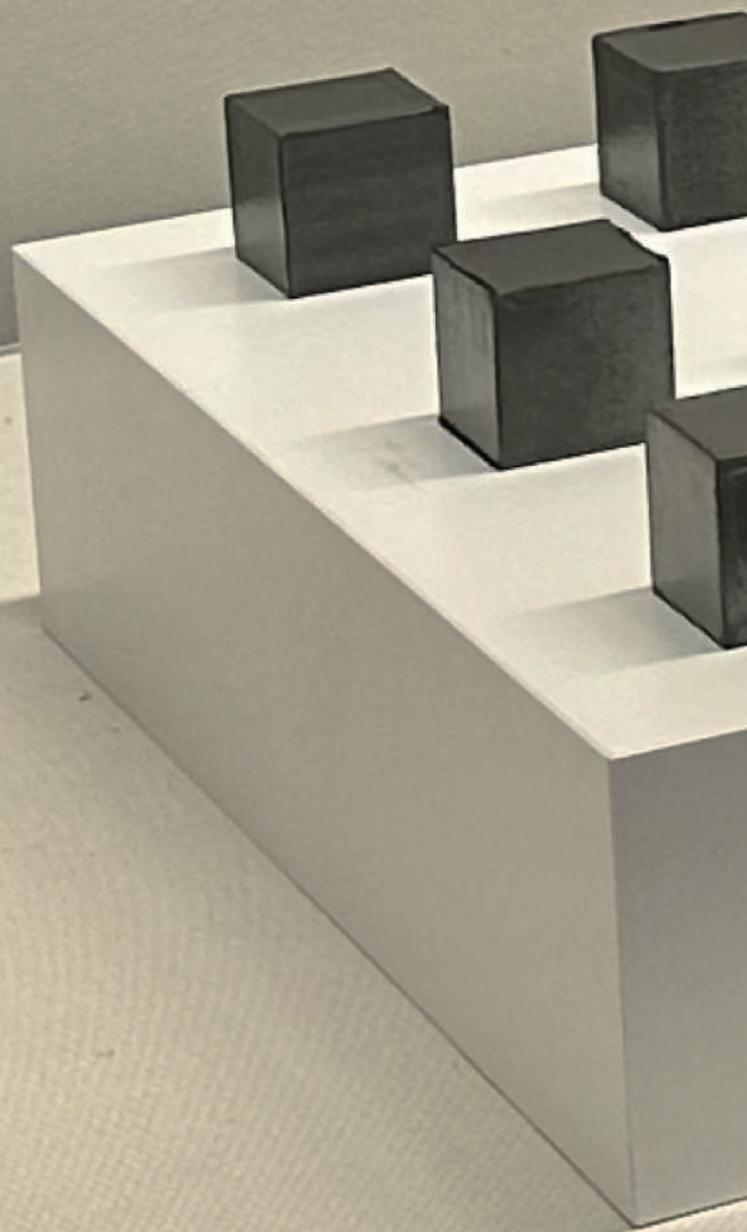
中村 恭子

アーツ・プラクシス演習 春・夏
2024

“鉛筆”デッサン
基礎課題
黒色の
物質性







の反復性

日常

「生きていくこと」を反復性から量的に還元し、

もの化する



LONG
T-L-D-N

STEREO 1274H 1234

サザン
スペシャル
プレゼント
SPECIAL

AGIN

MOVIE LICENSE
La La Land

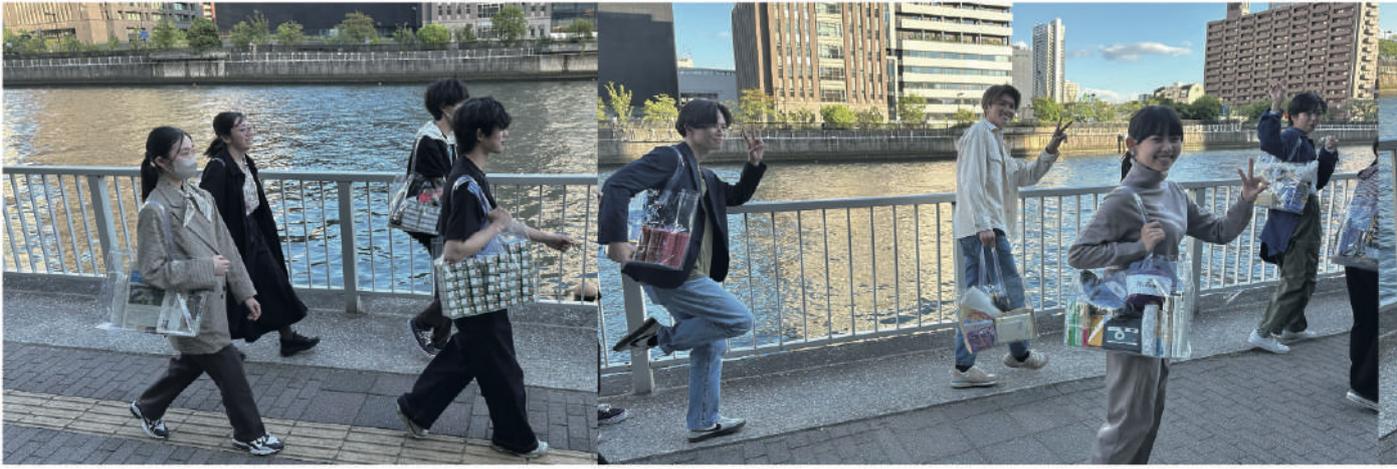
8-DISC
DVD SET
1000354652



須田瑞香 ユンテウン 橋本かれん
 岩成南奈 宮崎隼吏 大金あおい
 仲山慎司 菅野ありさ 中井希
 松宮実咲 碓井結子



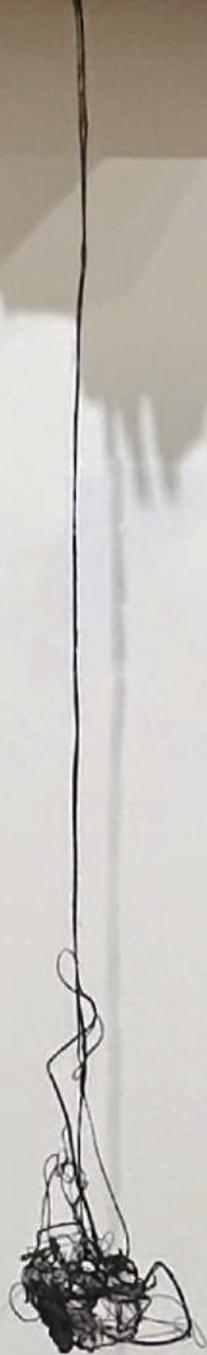




わたしの グラデーション

「わたし」の階調から探る、

「わたし」の原型

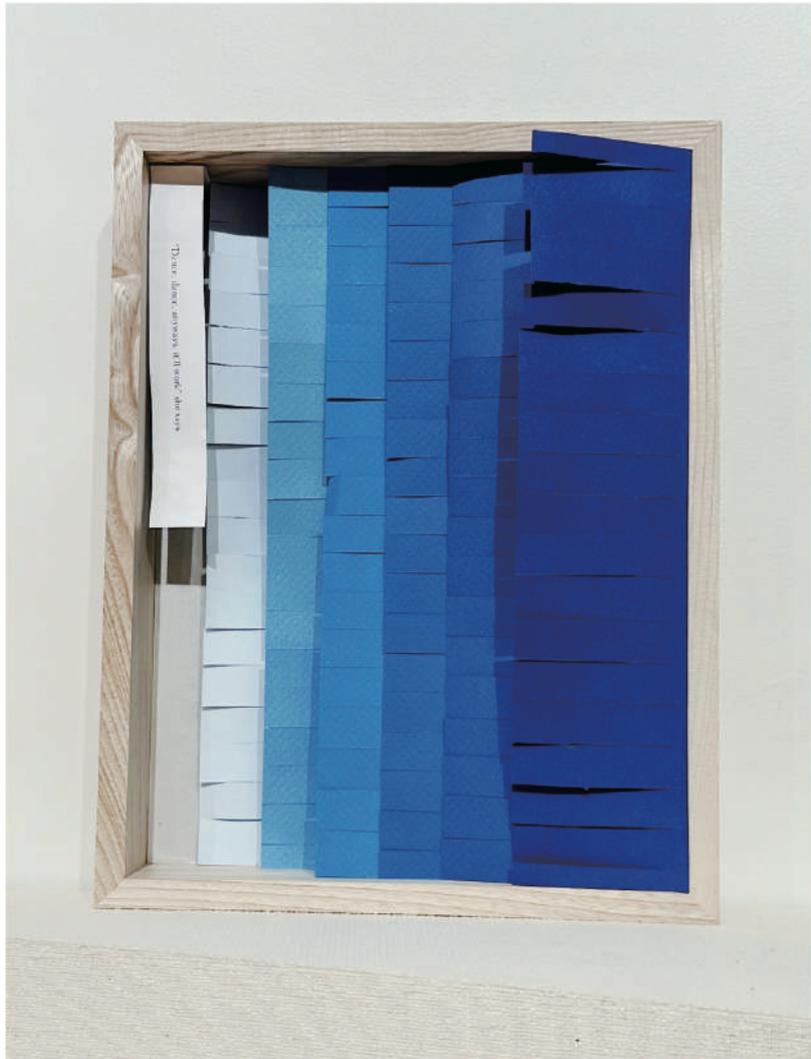




1 ユンテウン 《へらへら》



2 松宮実咲 《愛のアレゴリーとペラペラの棚》



3 須田瑞香 《ごごご》



4 仲山慎司 《ほろほろ》



5 橋本かれん 《カサ・ガサ・シーン》



6 岩成南奈 《きらきら》



9 碓井結子《めじゃめじゃ》



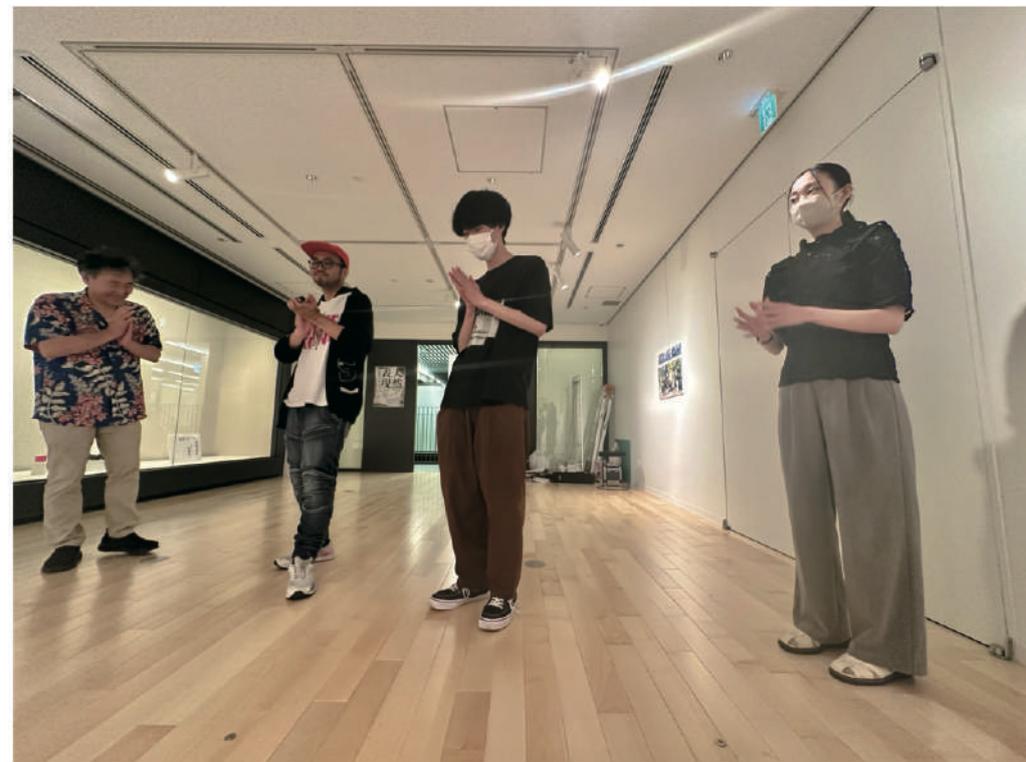
10 中井希《ぬりピカ》



11 大金あおい《こちゃ がちゃ》







中央：郡司ペギオ幸夫さん
右：松本直樹さん





初めに

本授業は副専攻・高度副プログラムの一つ「アーツ・プラクシス演習」(木曜日5限)で、制作実践を伴う演習授業として開講されています。木曜日4限の「実践芸術論演習」とは双子の授業の構成になっていて、アーツ・プラクシスは自らの実践による「構想」を、実践芸術論演習は他者の作品や時に自分自身の体験にまつわる「解説」を試み、それぞれの相互運動によって芸術を体験することが目標です。そのため、両方の授業を履修することが望ましいですが、いずれか一方のみであったとしても、比重が異なりますが「構想」と「解説」を往復できます。

春・夏アーツ・プラクシス

2024年度までのアーツ・プラクシスでは、春・夏では4課題を実施しました。

初めに、基礎課題として、金属を描く鉛筆デッサンです。ただし、白い紙に金属を鉛筆で描く普通のデッサンではありません。白い紙に鉛筆で描いていることはいるのですが、この授業では、ひたすら鉛筆で紙の目を塗り潰します。デッサンを行うとき、色があるのに、モノクロで表現することに違和感を感じるものが少なくありません。画の中で、黒が、描く物の色にならなければならず、それができるようにするには訓練が必要です。一方で、鉛筆も、鉛できていますから、鉛筆の鉛を紙に乗せれば、金属の質料がそのまま表現されることになりす。つまり色の形相(フォーム)と質料(マテリアル)の関係を黒色の物質

性として展開することが、本課題の真の目的です。色をモノ化し、「クロ」を表現するデッサン＝写実性(リアリティ)です。

2つ目の課題は、詰める、尽くす、です。ピニールバッグに身近なものを詰める。尽くす。ルールは、バッグのボタンが止まるくらいまで、みっちり詰めること。あらためて日常を集めてみると、何気ないモノの全体から「わたし」が見えてきます。「わたし」や「生きていること」は、とても曖昧で、主観的で、言葉で言い表すことが難しいです。それを、尽くすことで量的に還元し、モノ化することによって、そこはかたなくあらわにすることができます。生活や日常とは、そもそも反復性があります。しかし反復はコントロールできません。

3つ目の課題は日常に諧調を見る試みです。2つ目の課題のアドバンスド課題として設定しました。捉えどころのない「わたし」や「日常」をモノ化し、そこに諧調を見出してみます。そうしますと、その諧調をたどって、もしかしたら「わたし」の原型が見えてくるかもしれません。これは、ガイダンス時に示したゲーテの植物の「原型(Urform)」概念を応用した課題です。最終的に制作物にはオノマトペのタイトルをつけていただき、講評会で推理しながら鑑賞しました。今回、最初に箱のアートの先行例を紹介したために、「ボックス・アート」から逃れられない学生が続出してしまいました。来年度はこの反省を踏まえ、箱素材を用いずに、既存の建物や構造物などに見出した隙間を埋める＝開く、という課題に修正していこ

うかなと思っています。

これら1〜3課題は、中之島芸術センターの展示室を利用して展示し、展示会を開催しました。今年度は制作に時間がかかり、展示・設営実習の時間を多く取ることが叶いませんでしたが、良い展示となりました。センター7月開催の主催事業である天然表現「投錨するアート」展の招待作家である松本直樹氏(ミルク倉庫+ココナッツのメンバー)と郡司ペギオ幸夫氏(早稲田大学教授)を招いて、展示会の講評会を行いました。その際のコメントを招待作家のうち一人である郡司ペギオ幸夫氏に寄せていただいたので、本稿で紹介いたします。

4つ目の課題は映像表現です。逆再生機能やショットの張り合わせなどを駆使して違和感をもたらす映像を構成します。これは、来年度のオナー大学のプログラムで「デジャヴ」を構成する「課題を念頭に据えて、今回に限り、アーツ・プラクシスに導入してみました。映像鑑賞会では、「オモコロ」で紹介された「菓子盆選手権」を同時開催し、各々の菓子盆を紹介、人気を競いながら映像の講評会を行いました。映像より盛り上がったかもしれない橋本さんの制作した映像の、食べられない食事における卵の黄身がふるふると震えて可愛かったです。(2024)

課題「わたしのグラデーション」に対するコメント

※いただいた原稿のまま掲載します。どの評がどの作品について書かれているか探してみましよう。

郡司ベギオ幸夫

「作品」とは、芸術的感興を召喚する「穴」を有する完全な不完全体である。

穴は、壊れていること、不備を意味するものではなく、「あたかもそこに欠損があったが故に、何かがそこに呼び込まれしまった」と思える意味での、抽象的存在である。穴が存在する意味で、作品は不完全であり、しかし、穴が完璧に作られているがため、作品は完全である。

だから、芸術的作品は、穴によって鑑賞者を吸い寄せ、鑑賞者にあつて、穴に何らかの体験、芸術的感興を召喚する。

講義の最初に全員が制作したビニールバッグのコンパクト・オブジェクトは、まだ個人の個性性に留まり、「作品」に至ってなかった。しかし、個人的な箱として提示された制作物は、この意味でどれも「穴」のある作品になっており、私に強烈なイメージ体験を引き起こしてくれた。

(1) コカコーラ

コカコーラの瓶の中に、さまざまなものが入っている。私が学生の頃、捨てずに溜まった瓶は、小さなゴミを入れるゴミ箱だった。ある瓶は液体、ある瓶はタバコの吸い殻、ある瓶はレシートが入れられ、壁際に並べられていた。逆に瓶は、透明で世界と隔絶した異世界を実現してくれるコンパクトな空間でもあり、宝物を入れる場合さえある。ポトルシップはその典型的例だ。ここに展開される、さまざまなコカコーラの瓶は、ゴミでも宝でもなく、しかし幼児が自分の好きなものを入れ、棒でつくくようなものが収められている。幼児の成長を期待させるように、コカコーラの中身がどのように成長するか、期待させるものがある。とりわけ、コーラの並んだ箱は、自前で作った鶏小屋のように、横板で覆われ、支えられ、成長する中身の暴走を食い止

めているかのようだ。

(2) お湯で変形するプラスチック片(もちまる)

沖繩の海岸には、さまざまな大型の貝や珊瑚片が散乱している。それらは波や砂によって、その表面を磨りガラスのように摩滅させられている。まるで人工物のようだが、はつきりと、生き物の遺骸なのである。ところが、同じ海岸には、茶色や緑色の、丸く磨かれた半透明の石が混じっている。何か逆に、こちらは南方に固有の、未知の生き物なのかと思ってしまう。こちらは、実は、ビール瓶やコーラの瓶の破片が、摩耗し丸くなったガラスのかけらなのだ。まるでガラスが、生き物の遺骸に擬態しているかのようだ。人工物は、擬態がバレンないように、小さくかしまっている。箱に貼られた半透明のもちまる達は、遺骸への擬態をさらに進化させ、いよいよ生きている生物への擬態を始めた、ガラス片達ではないのか。彼らは箱の中を通じて、擬態者が生きる異世界へ侵入していくのだ。

(3) ブルーの波

マテルの人形・パービーの世界を描いた実写映画『パービー』では、登場人物の全てが生身の人間で、彼らは、全てが作り物の世界に住んでいる。ジュースを飲む人形遊びが、おもちゃのジュース・パッケージを人形の口元に持つていくだけであるように、映画の中のパービーは、ジュースを飲むふり、パンを食べるふりをするだけだ。海岸から見える波は、シンガポールにかつてあったタイガーバム・ガーデンのように、漆喰カコンクリートで作って着色したものだ。常にパービーの歡心をかいたい男友達のケン は、サーフボードを持って、作り物の波に突進し、弾き返されて怪我をする。このブルーのグラデーションで作った紙の波なら、ケン は怪我をすることもないし、パービーやケン は、作り物ではなく、波の抽象を具象化することの意味に思いを馳せたかもしれない。

(4) 銀色の菓子箱

銀色のアルミ箔を貼った箱の中に、さまざまな銀色のものが溢れている。幼稚園児だった頃、鶏小屋の隣にあった物置で、時々物置に入り込んだ鶏を追いながら遊んでいた。そこにはさまざまな道具が散乱していた。幼稚園児にとって手頃だったのは、銀色の菓子箱のような箱で、そこにはクリップや針、ネジ、電池や、よくわからない金属片が並んでいた。その中になぜか古い手錠があつて、遊んでいたら従兄弟の腕に嵌って取れなくなってしまう。親が帰ってくるまでそのままであつたはずで、その状況で、泣いて騒ぐようなこともなく、手錠をしたまま、大人しくネジやクリップと遊んでいた。この作品の銀色の箱に並べられた、まるで不要な物は、しかし、幼児らにとって同様、作者にとって、機能的なるものリアリティを感じさせる、特別な存在だったのだ。

(5) さまざまな引き出し

びつしり並んだ小さな引き出しは、今では異界ではないかとさえ思える。祖母たちが暮らした部屋の筆筒のようだ。私の子供の頃、遊びに行くと、その引き出しの上の方を開けて、中からお札を引っ張り出し、ちり紙に包んで渡してくれ、飴のようなものを出して、やはりちり紙に包んで渡してくれたものだ。その引き出しから出したものは、何か抹香臭いというか、独特の香りさえしていた気がする。この作品の小さな引き出しの奥には、小さな石鹸や、マッチ箱、いやもつと探せば奥には何があるのだろうか。もはや流通しないような通貨や、昔の子供が使った蠟石、先祖の誰かが実は外国へ行った時の昔の外貨、「こっくりさん」のオリジナル版、ウィジャゲームのゲーム板みたいなものまで隠されているかもしれない。それはもはや、作者さえ知らないものに違いない。

(6) 濡れたレシート

かなり前のことだが、旅先で夜散歩していると、火事で焼け落ちた家屋があつた。規制線も張られておらず、中に入

ることができたため、敷地内に分け入って、瓦礫の中を歩いてみた。二階建てらしかったその家は、壁がすつかり無くなり、やや丸みを帯びた矩形の炭が並んだように見える。炭化した柱だけが聳え立っている。雨が降っていたこともあり、地面も柱も濡れているものの、焼けた炭の匂いが強烈に漂っていた。まるで鎮火した後の水のようにも思え、水と火の両者が、そこには色濃く残っていた。ここにある作品は、レンシートにインク消しのような液を垂らし、レンシートを滲ませている。そこに火は全く関与していないにも関わらず、まるで焼けた跡のように見える。まさに火事の痕跡のような、火と水の共立を感じさせる作品は、火事の現場のように心をざわつかせる。

(7) お線香

滞在している英国のアパートの前には墓地が広がっている。一つ一つの墓石をみると、十代の死者の墓が多いのに驚かされる。そして死者が打ち込んでいただろう、サッカーボールや自転車などのミニメントまで、設置されている。あなたがなくなつて本当に心に穴が開いたようにだ。私たちが生きていく限り、あなたは心の中に生きていくといった碑文が、ありきたりでありながら、胸を打つ。墓碑は、死者のためのものではなく、生者のためのものだと思ひ知らされる。アパートの前の墓地にはかなり古い墓碑もある。もはや訪れる者もないだろう。死者を知る者が死に絶えた時、墓碑は、人との関係をほぼ喪失してそこに屹立することになる。この作品もまた、生者のためのものだろうと推察される。しかし同時に生者のための意味を脱色し、「作品」としてここにあるのだ。

(8) ギター

ピンクや黄色、ブルーに彩られたギターは、それ自体でキッチュとは何かを考えさせてくれる。キッチュとは、本来、古臭く、安っぽい感じ、まがい物といった、悪い意味でしかないものだったが、廃墟に対する未来感と同じよう

に、その安っぽさ、まがい物感が、一周回って、新鮮で価値あるものだと思わせる感覚を指す。一周回ってと言ったが、おそらくキッチュには、一般的、制度的に与えられる美と、そうではない非美とのせめぎ合いがあり、美と非美との区別をナンセンスと思ひながら、その区別の根拠も含めて脱色する果てに、突然現れる感覚が、「キッチュ」なのだろう。本作品では、そのようなキッチュさに、二重写しに、聴かせる(奏でる)ことと聴くことの混同が、眩暈のように脱色され、キッチュの現前が新たな楽器の現前として提示されている。

(9) 根つこの樹木

小さな木の根を枝ぶりに見立てた樹木が、箱の中に息を潜めている。それは生きていく樹ではなく、木の痕跡だ。そこにある木材や合板までも、色を塗られ、人工物ではない木の痕跡になっている。木の痕跡は、木の死骸ではなく、痕跡それ自体として生きる世界を形成しているようだ。クエイ兄弟の『ストリート・オブ・クロコダイル』は、ネジと漆喰と埃の世界で、そこに登場するのは、頭部に穴があり中に蜘蛛の巣の張った人形、包帯と漆喰で固められた残骸のような人形、ネジが足りずに誤作動する機械たちだ。それはやはり、人形や機械の痕跡のはずだが、生命の別な存在様式を示すことで、我々に逆に生きていくことを考えさせる。動く生き物の痕跡は、傀儡感を与え、「」やロボットのイメージを与える。植物の痕跡は、それを超えた新たな知のあり方を与えるに違いない。

(10) 大木さんが出てきそうなドアの向こう

大木裕之さんは、八十年代末、ゲイのポルノ映画を出発点として、現代アパートに移行していった映像作家だ。ラメ入りのタイツにメタリックのトランクス、上半身も色鮮やかな「」シャツの上にびっちりしたタンクトップ、頭は周囲を刈り上げ、うねった頭髪は金色に染め上げられている。その「ド派手な格好とは裏腹に、映像は常に陰鬱に満ち、「向こ

う側」を垣間見せる。ゲイの男子たちが物憂げな表情を見せた後、アパートの屋上で練り広げる。みんなバラバラでリズムだけきつちりと合ったダンスは圧巻だ。この作品は、その大木さんが奥から出てきそうな彼のアパートの玄関のような雰囲気だ。いや、おそらく大木さんだけではない。この作品の作者もまた、この作品の奥に引っ込んだ陰鬱に満ちた存在であるに違いない。前面化したこの華やかさも確かに作者の一部なのだ。

(11) 折り紙片と釘に毛糸

箱の中一面に貼られた、色とりどりの色紙片は、幼稚園の頃、教えてもらったミノムシの遊びを思い出させてくれる。棲家であるミノから出して裸にしたミノムシ(ミノガの幼虫)を色紙片と一緒に箱に入れておけば、色紙片を集めてきれいなミノを作り、ミノムシはそこに入るのだ。その一面に散りばめられた色紙の箱に打ち込まれた釘と、そこに貼られた毛糸は、箱の中で蠢くミノムシの軌跡だろうか。箱の中いっばいに歩き回ることにはせず、できるだけ、あまり歩かずに済むように動き、そのうち、たまたま自分が歩いてできた軌道を、まるで昔から自分の棲家だったかのように行き来する。いや、それは、まるで人間の生活のようではないのか。個性や固有性はこうして、作られていく。そんな馬鹿な。そういう人間の解釈を退けるように、ミノムシは、色紙のミノの中で眠る。

秋・冬アーツ・プラクシス

秋・冬のアーツ・プラクシスでは、本格的な日本画制作を実施しました。とは言っても、日本画を目的としているわけではありません。日本画の素材を用いて絵画を描くことで、遠近法とは異なる空間概念を学び、写実性やリアリティとは何かを捉え直すことがこの授業の醍醐味です。

まず、ガイダンスでは遠近法的な空間表現に対して、日本の古画にみられる特殊な空間表現について示します。消失点をあらかじめ配置し、画家の視点によってあらかじめ規定される「こちら側」「むこう側」という空間が設定されるのが、遠近法です。現代人はルネサンス以降、この空間概念のリアリティからほとんどのがれられません。一方で、古代芸術、とりわけ日本の古画では、全く異なる空間概念(世界観と言っている)がありました。それを、中村は「書き割り」の空間表現と称し、それにまつわる論文を書いてきたので、紹介します。

例えば琳派などにみられる山並み風景は、山がまるで板のような図形として表現され、それが連なっています。それはまるで舞台背景装置の「書き割り」のような表現であることからそう呼称しています。書き割りは表のみに(舞台の)世界が描かれ、袖に回れば、世界はない。裏がないのです。つまり、書き割りの視点で見る山々のこちら側に対応する山の向こう側はないのです。世界は山のこちら側までが認識可能な限界。世界はそこで切れていて、その背後に、知

覚できない「外部」がある。書き割りだから、そう、外部を信じていることができる。だからこそ、「山越の阿弥陀」がいる世界を生きたことができる。古代人は、そのような現代人とは異なるリアリティを持っていたのではないのでしょうか。

郡司ベギオ幸夫氏の天然知能における創造モデルにおいて、肯定的・否定的アンチノミーが共立すると同時に互いの強度を薄め、関係性を無効にし脱色化が起ころ概念構造も示しました。否定的アンチノミーが構成される時、「不在」が物象化される。動かしようのない具体的な「モノ」になる、すなわち物象化が、例えば、「書き割り」の山々です。では、どのようにしてリアリティの質料(マテリアル)と形相(フォーム)の関係を展開させることができるでしょうか。ここで、日本画なのです。

授業では日本画の金箔表現を用います。金箔は構造色のため、背景に配置すると、光のあたり具合によって金箔背景が前傾化し図が影になるため、地と図の肯定的・否定的アンチノミーが共立しながら無効にされる作用があります。これを利用して、日本美術に現れる日本の古来からの世界への感覚を体験します。ガイダンスでは、シルエットが生み出すリズムに面白さを見出し、隙間をうまく作ったり、また、背景に物質感を出したり物を背景化したりする面白さをモチーフで構成する例をあげました。

実はこの授業は九州大学の理工系学生にも実施したことがあり、大阪大学も含めてこれまで 60名近く

の制作物を見てきました。その中で今回、松宮さんの自動販売機の作品が突出して素晴らしいと感じました。実はこの年の履修生は他のみんなも画題が凝っていて、蜘蛛の巣の画面構成力や「塀の上のヘイ」(タイトルが良いですね、どの作品か探してみてください)なども面白い出来なのですが、なぜ自動販売機の作品が良いのでしょうか。この作品では、光が金箔として物質化されていて、光の輝きという理念的で抽象的な表象(形相、フォーム)でありながら、物体(質料、マテリアル)でもあり、空間を示しながらそれが個物でもある。そういうマテリアルとフォームの共立という日本的で金箔表現の意義が構築された非常に稀有な絵画でした。左の自販機が現実ではあり得ないのに影に隠れて半分見えな感じもイイ。初めての日本画制作で、まだ筆致におぼつかない部分はありますが、それでも非凡なものを感じ、及第点の画力でした。課題への理解が深く、私がガイダンスで例として示したことよりもさらにオリジナルに展開されたと言える絵画でしょう。(2023-24)

アーツ・プラクシス演習 秋・冬
2023-25

脱色する 空間概念

日本美術の古典技法を用いて転回する

現実のリアル

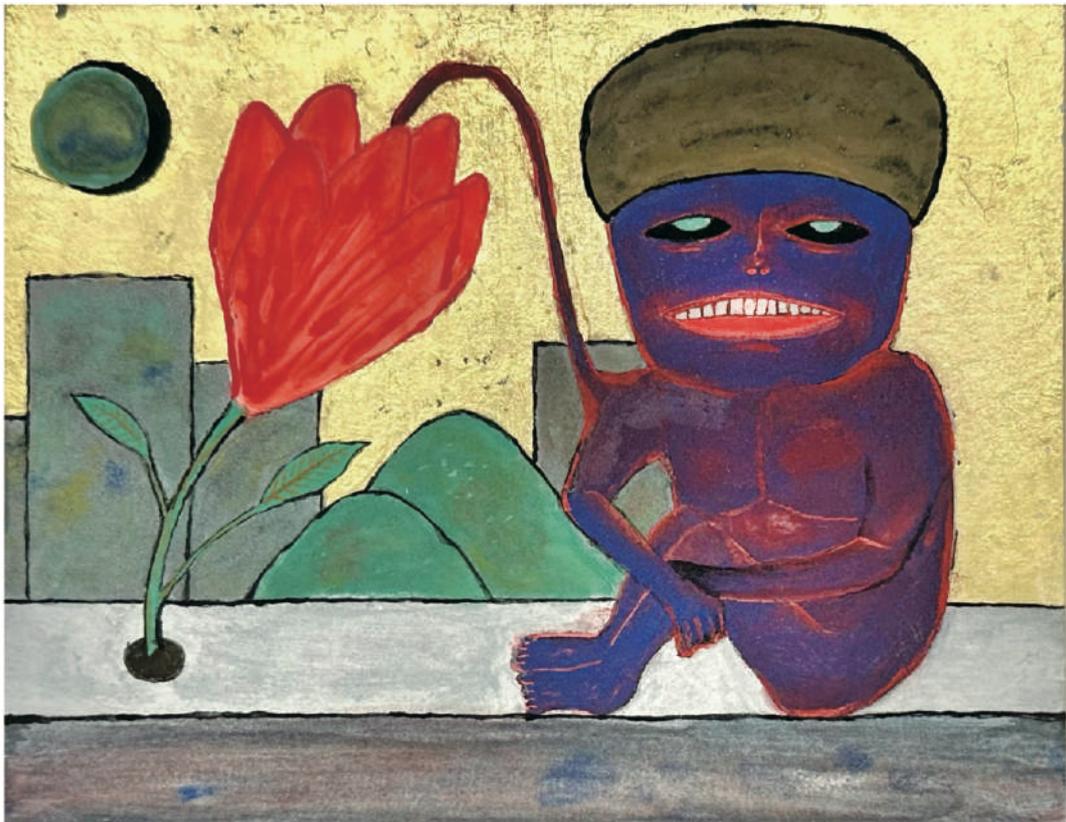


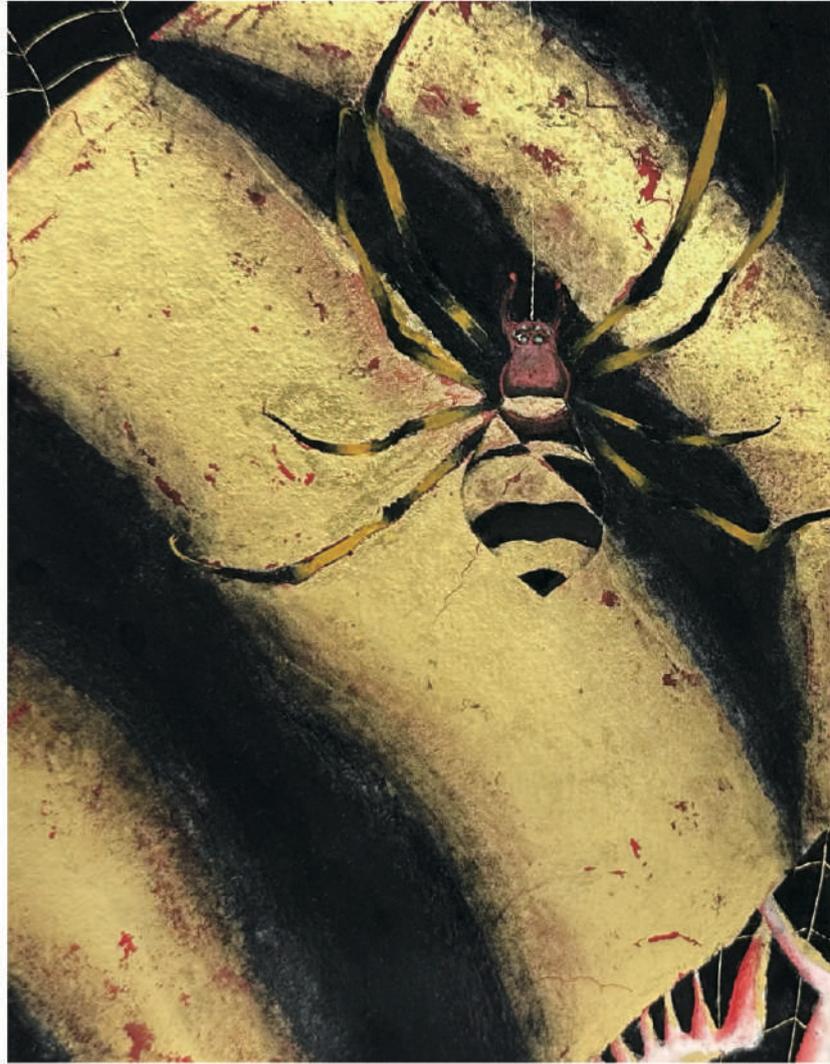


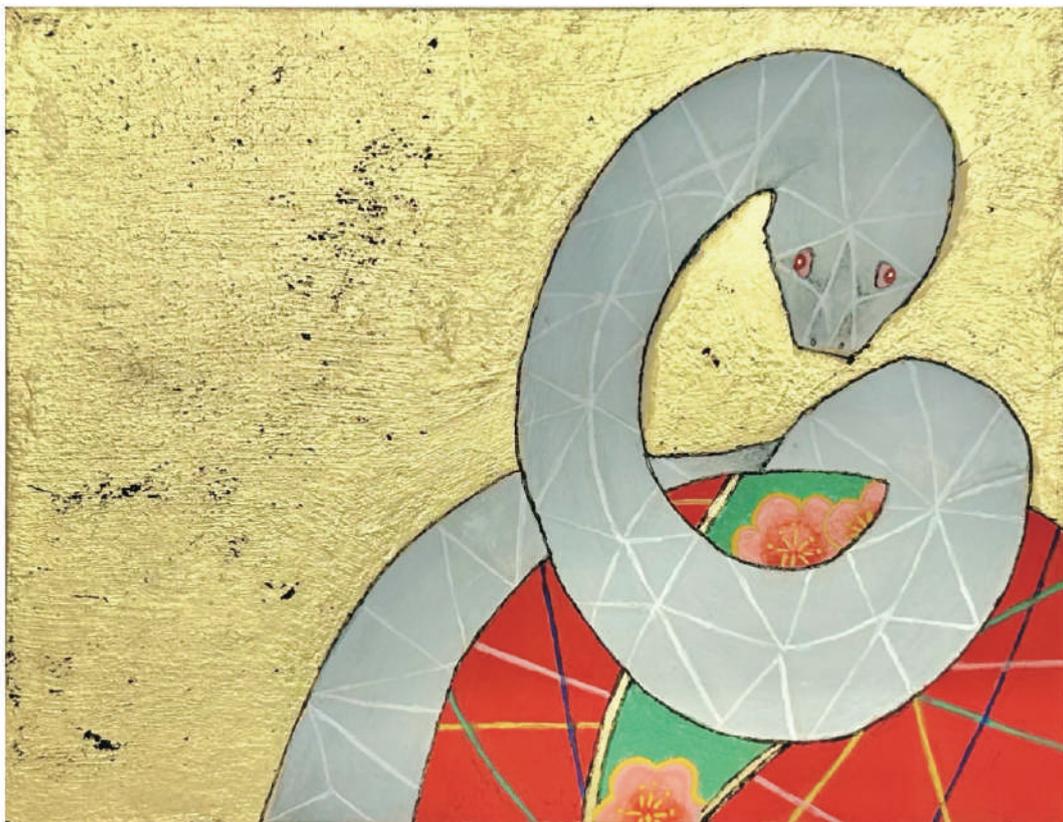
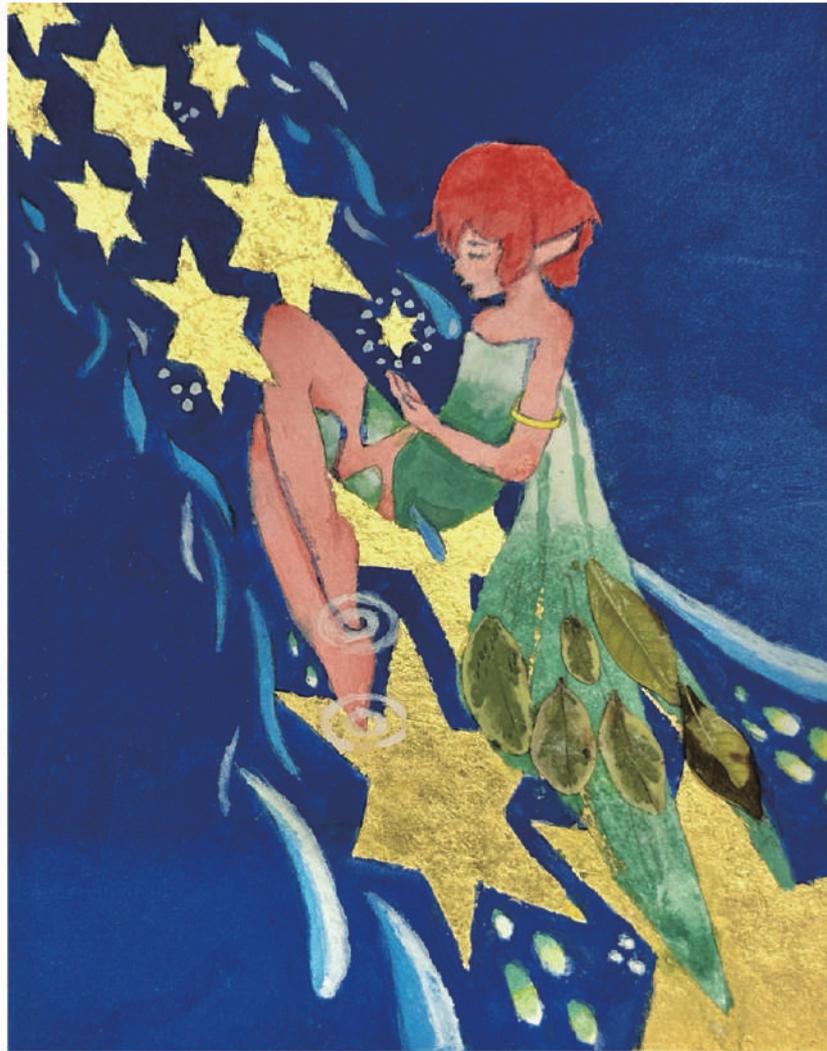




















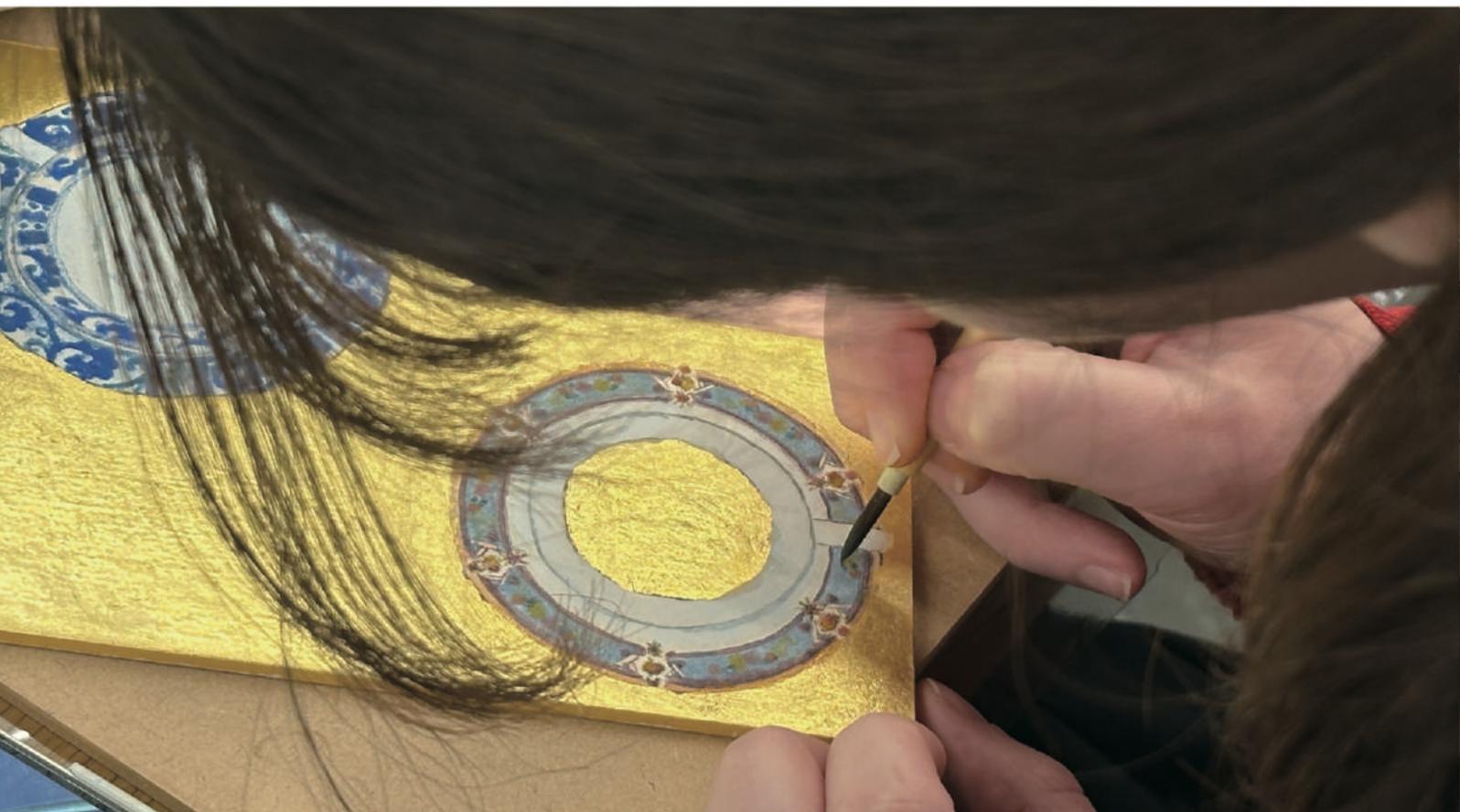
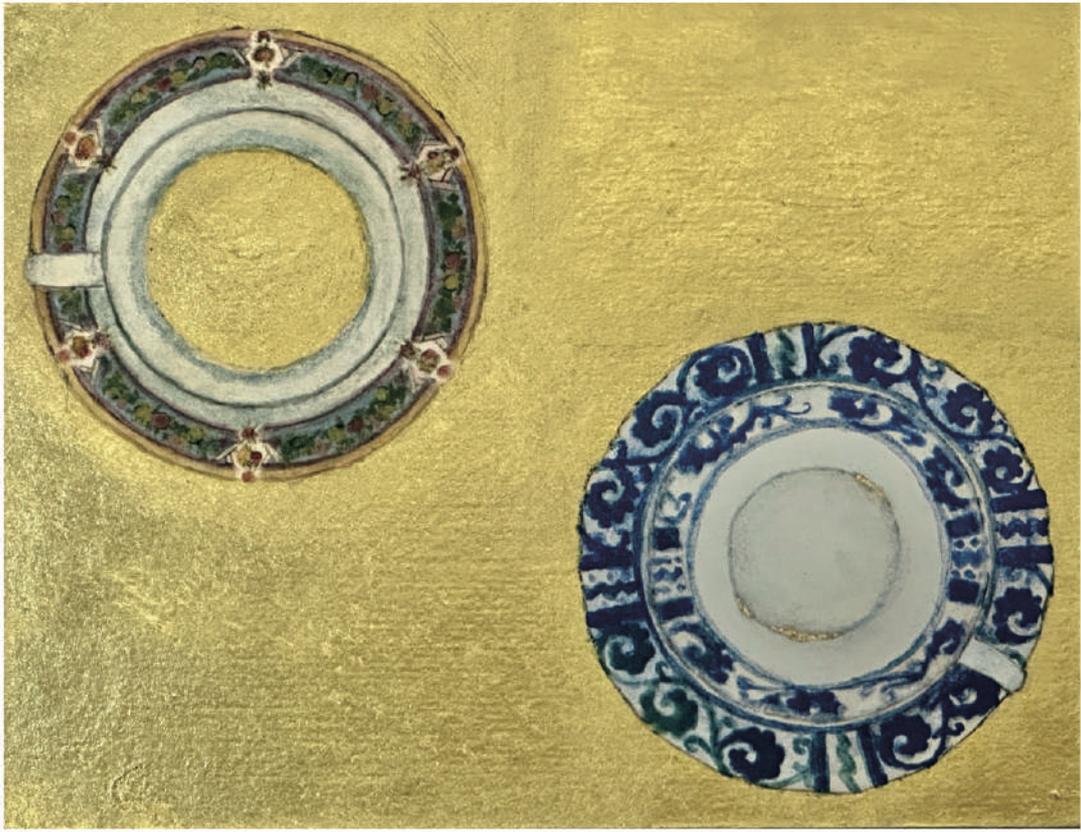
2025年度のアーツ・プラクシス秋・冬でも、皆さん挑戦的で独創的な構成を試みました。植田さんの絵画では、島々や雲、海面に落ちる影がリズムミカルで愛嬌がありながら、見えたり消えたりする描かれたモノの物質性の不可思議な佇まいを、金地の海の光沢が強調していて、画題も含め力作です。冊子の写真ではその臨場感が再現できません。いちごの果実部分を盛り上げ材で凹凸を出してぷっくりさせたり、微細な描写の金木犀やデザイン性の高い斑入葉っぱなど、美術系大学一年生かと思わせるような実力派もみられました。14回の講義で、就活や試験、本業の研究で忙しい中、完成度の高い仕上がりです。徐々に線が卓越してくるのを目を見張ります。講義最終日にこだわって加えたカップの飲み残しの切金もニクいですね。



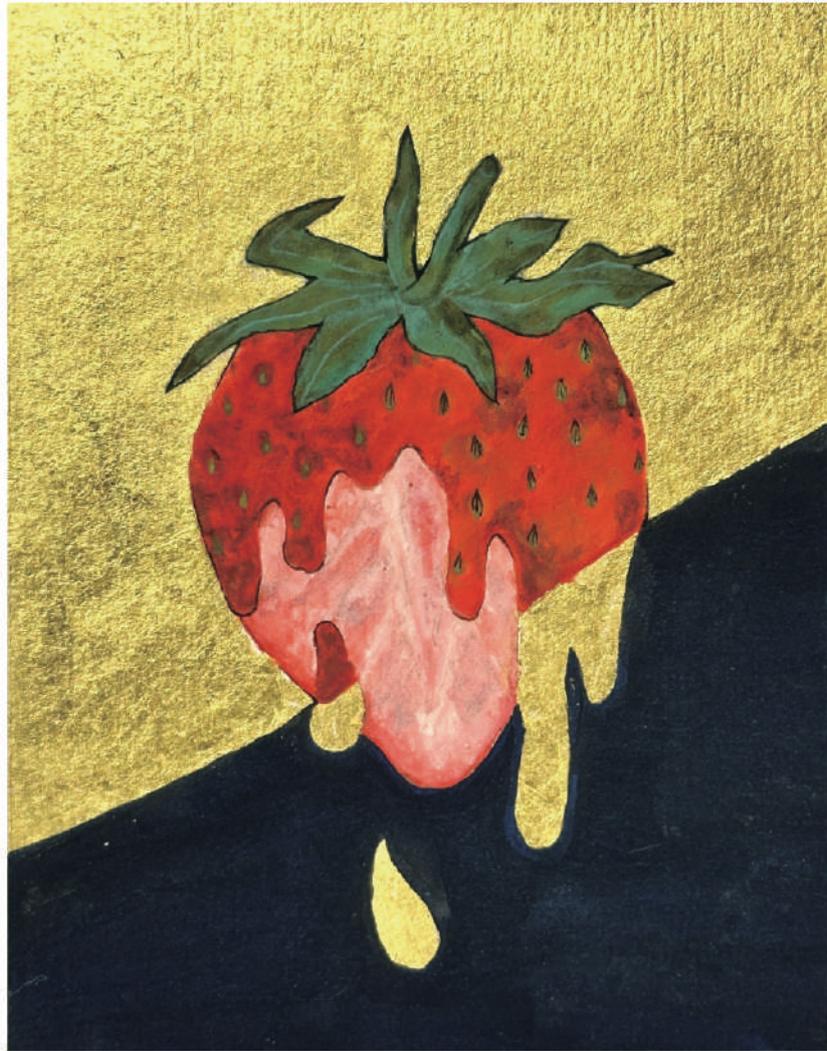












アーツ・プラクシス演習 春・夏
2025

2025年度のアーツ・プラクシス春・夏では、設営と展覧会開催に力を入れました。芸術センターの展示室を使って、照明の使い方、光で空間を作る方法、壁面と什器との関係など、実際に自分たちの制作物をどのように効果的に設置するかを考えながら、設営を行いました。展示をすることで自分が作ってきたものがなんだったかを再確認しつつ、鑑賞会・講評会に挑んでもらいました。作品タイトルをつけることも課題の一つでした。「無題」は禁止です。講評会では一人ずつ自分の制作物について言語化することを目指しました。課題は2024年度に実施したピニールバッグと階調の課題を集約した「日常の反復性」「わたし」を量的に還元し、その階調に見る「わたしの原型」、「鉛筆デッサンによる黒色の物質性」、そして新課題として「スキマを埋める、尽くす、ひらく」の隙間を見つけて不在を物象化する」を実施し、これらの成果を展示しました。





草野怜子《居場所》



釘宮彩葉《縮び》



植田佳奈子 《形成される私》



廣瀬理久 《めぐる》



中村創太 《No Cardshop》



オウ セイイ 《首飾りのギャラリー》







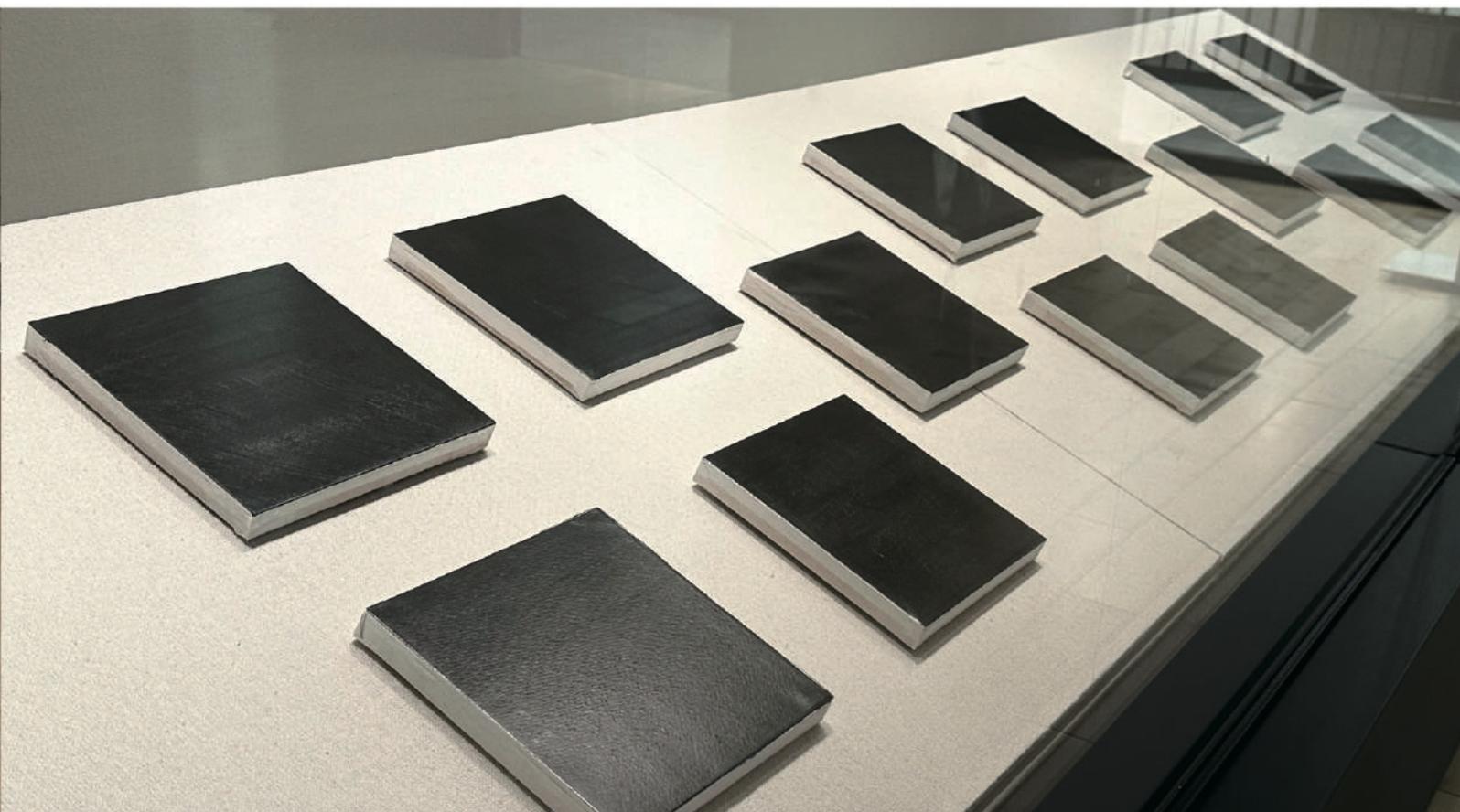
加用瑠璃《記憶の質量》



四方咲良《経験したキオク》, 右は映像を投影した様子



通崎晃史 《人生のフリップパーピンボール》
Flipper Pinball of Life





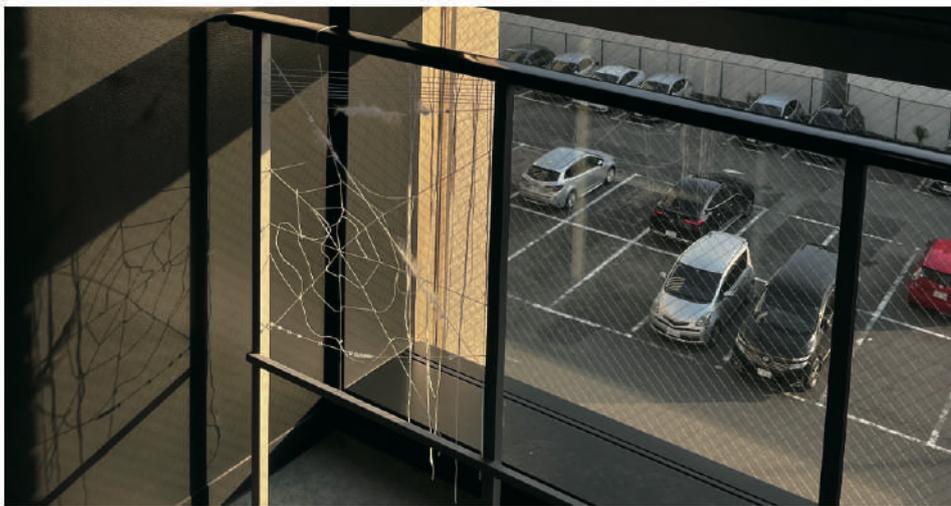
鈴木龍之介《火種》



スキマを埋める、尽くす、ひらく

隙間を見つけて、

不在を物象化する



通崎晃史 《恐竜の恋人》 Sweetheart of Dinos
 鈴木龍之介 《流星群》
 加用瑠璃 《あみめ虫》
 オウセイイ 《知の隙間を埋める》
 草野怜子 《棲みつく》
 廣瀬理久 《はずむ》
 中村創太 《侵入経路》
 釘宮彩葉 《侵入経路》



四方咲良
《声》
植田佳奈子
《化粧》









大阪大学中之島芸術センター開講授業アーカイブ
2023-25

[執筆] 中村恭子 中之島芸術センター准教授
郡司ベギオ幸夫 早稲田大学教授,2024年展覧会ゲスト

[デザイン] 中村恭子

[撮影] 中村恭子、鬼頭茜、鄭実香、古谷能子

[発行] 大阪大学中之島芸術センター

[発行日] 2026年2月28日

[問い合わせ先] kyoko608@gmail.com (中村恭子)

担当教員：中村恭子

- アーツ・プラクシス演習
- アーツ・プラクシス演習 I-1・2
- アーツ・プラクシス特殊演習 I-1・2

[春・夏] 制作演習：天然表現を研ぎ澄ます

[秋・冬] 制作演習：日本美術の写実表現

©2026 NAKAMURA Kyoko, GUNJI Pegio Yukio

Printed in Japan

*本書の無断転写・転載・複製を禁じます

